

1. 支部長退任のご挨拶

関西支部及び東山会の益々の発展を祈りながら

支部長 白木 博明（昭和23年卒）



このたび、支部規則により平成15年度支部総会の日をもって関西支部支部長を退任させて頂くことになりました。後任には支部幹事会において清水 義一副支部長を推薦し、内諾を得まして、ここに第六代関西支部長が誕生します。本部資料によれば昭和31年生源寺 順初代会長の時、栖宮 勇二氏（故人）が初代支部長になられ22年間務められ、次いで井川 正雄氏（故人）が3年、工藤 廣氏が9年、川口 啓三氏が7年、白木 博明が7年務めて、清水 義一氏にバトンタッチすることになります。この間約50年、創設期の諸先輩の名古屋大学に対する思いの深さに心打たれる次第です。

僭越ながら、小生、平成8年、川口前支部長の後を受け、支部長として伝統ある約300名と推察される支部会員の顔が、お互いに見える楽しい同窓会を目指し、会員諸兄のご支援、ご協力のもと、力一杯、仕事をさせて頂きました。時には幹事諸兄のご家族にも、陰のご苦勞をおかけし、厚く御礼申し上げます。皆様のご声援により、関西支部長は、平成10年度より本部理事として、本部との連携も格段に強化できました。

多くの機械系同窓会がそうあります様に、東山会は母体名古屋大学の職員と、主として産業界で活躍する同窓生で成り立っています。大学人は母校の現状や研究内容を同窓会にフリーに伝えられるのに比べ、産業界にあっては、同窓会のお世話をさせて頂くにも立場上、大きい違いがあります。早い話、企業では卒業大学名すら話すことはあまりないし、特に機械工学の卒業生は、殆どの生産分野の企業で広く分布し、なかには商社、医学、防衛、金融、異業種にも人材がおられます。このことはメリットでもあるがデメリットでもあり、現職を兼ねながら同窓会の世話を願う人材を、各年代にわたり発掘することはなかなか難しい課題です。近年デフレ経済のもと、企業の合理化が進み、大企業といえども優勝劣敗の時代で、リストラはいつ自分にとの思いの会友も随所におられます。関西支部以外に支部ができにくい原因でもあります。

幸いにも、清水氏は昨年まで情報化時代のテクノロジーに深い業界に関係され、産官学連携の時代背景、大学の独立行政法人化にも明白な識見があり、同窓会として何ができるか、真剣に考えて頂ける方です。また多くの気心の知れた支部幹事諸君が留任願えると聞いており感謝にたえません。

我々の母校名古屋大学は今や名実共に、日本を代表する大学として、修士、博士コースの入学者が学士コースの入学者より多いという国際的な大学として、評価されるべき時にあります。東山会並びに関西支部がそれに対して何ができるかを考えながら、会員諸氏と共に益々の発展を祈り、支部長退任のお礼の言葉とします。

（平成15年度関西支部便り 平成15年8月記）

2 . 大学の近況について

名古屋大学大学院工学研究科
機械工学専攻 教授 新美智秀
(昭和52年卒)



機械系専攻は、これまで工学部3号館を中心にその居を構えていましたが、工学部2号館北側と南館がそれぞれ平成14年春と冬に改修され、事務室も含めてすべての研究室がここに移転しました。工学部2号館には、機械航空工学科に入学する学部生に関連した機械工学専攻、機械情報システム工学専攻、電子機械工学専攻、航空宇宙工学専攻すべてが集まりました。建物の内外ともに見違えるように美しくなり、以前の2号館の面影はほとんどありません。景気の冷え込みにともない、2号館の新築は許可されず、改修のみ予算が認められましたが、今後の改修はさらに民間資金を導入することになるようです。

平成15年4月には、工学研究科などが中心になって情報科学研究科が新設され、機械系専攻からも数名の教官が同研究科の複雑系科学専攻などへ異動されます。工学研究科も大専攻・大講座制へ移行する概算要求を提出しており、国立大学が法人化される平成16年度には新しい組織となる予定です。法人化に向けた準備も大学執行部を中心に、多くの小委員会でソフトランディングを目指した検討が進められています。

平成14年11月に、名古屋大学工学部・工学研究科は大学評価・学位授与機構による教育評価を受けました。各学科と専攻ごとに作成した教育に関する自己評価書に関する質疑応答、教官や卒業生との面接など3日間にわたる訪問調査が実施され、名古屋大学工学部・工学研究科は非常に高い評価を受けました。特に、名古屋大学工学研究科が全国で初めて導入した「流動型大学院システム」、すなわち縦系となる従来からの「領域専攻群」と横系となる分野を横断した「複合専攻群」からなるシステム(ダブルメジャー)は最高ランクの評価を受けました。機会系専攻でも電子機械工学専攻、航空宇宙工学専攻と共同して、複合専攻として「マイクロシステム工学専攻」を組織しており、横断的な研究・教育の交流を通して大きな成果を挙げております。

名古屋大学では、産学官連携推進本部を平成14年5月に立ち上げ、「点から面へ」(個人から組織へ)をキャッチフレーズにして、平成15年度から本格実施となった知的クラスター創成事業などに代表される多くのプロジェクトを推進しています。また、インキュベーション施設を利用したベンチャー支援も積極的に行っています。

平成14年には、学部単位だった従来の同窓会を全学同窓会として再結成しました。会長と副会長には、東山会会員でもあられる豊田章一郎氏と太田和宏氏がそれぞれ就任され、東山会としても非常に喜ばしいことであります。

上記のように、大学は大変厳しい変革・激動の時代を迎えようとしております。今後とも、皆様方の温かいご支援とご助言を賜りますようお願い申し上げます。

(事務局注：本稿は平成14年11月16日の支部総会での講演概要を、新美教授にまとめていただい

たものです。)

3 .(特別寄稿) 中国人と付き合うには

川本 利治 (昭和 3 3 年卒)



1972年9月に当時の田中首相が直接北京を訪問して毛主席と握手を交わし、日中国交回復が実現したわけですが、その直後に周首相から新日鉄に対して圧延工場建設への協力要請がありました。そして私は73年8月からそのプロジェクトに参画し、80年2月に検収をパスするまでお付き合いをさせられました。中国の大きな出来事の内“文化大革命”は1966年8月に始まって76年10月に終了していますので、丁度文革の末期から鄧小平氏が復活して行った市場経済化の初期にまたがる中国の大変革の様子を目の当たりにしてきた次第です。その後も、中国とのお付き合いは間歇的ながら続き、2年前の秋にも南京の鉄鋼会社を友好訪問してきました。そしてそのお付き合いを通じて、中国人の色々な面を見てまいりましたので、今日はそれらをかいつまんでお話ししたいと思います。

中国人と上手く付き合っていくために一番重要なことは、中国人の国民性をよく理解する事です。そして中国人に一番根付いているのは、やはり中華思想だと思います。即ち中国は世界の中心にある華だという思想で、その華を慕って世界各地から来る人々を上手にもてなしてやるのが華の役割だという考え方です。だから中国人はもてなし上手です。そしてまた誇り高き民族ですから、人前で名誉を傷つけられるのを極端に嫌います。そのため会議の席上で自分の主張を頭から否定されると、屁理屈を言っても頑強に粘ります。これを避けるためには、相手の主張にも一理あるが、この方がもっと良いという言い方か、若しくは会議ではペンディングにして後で小グループで話し合うのが良策でしょう。

また日本人に理解し難いことの一つに文革における秩序の破壊がありますが、彼等に聞いたところによると、4人組は“人間は生き物だから体調の良い時も悪い時もある。体調の良い時はもりもり働いて国家建設に貢献しよう。しかし体調の悪い時には気兼ねなく休養でき、それによって一切差別を受けない労働者の天国を造ろう”と呼びかけ、体調が悪いと言っている元気そうな労働者に、体調が悪そうには見えないなどと言うと、労働を強制しようとしたと言って大衆裁判で吊るし上げるということが行われ、管理は悪であるという思想に結び付けられて、徹底的な秩序の破壊に繋がっていったのだそうです。そして働かなくても差別を受けないなら、働かない方が得だという思想が蔓延していった次第です。

ところで中国の挨拶言葉は“ニイハオ”が一般的ですが、実はこれは共産党による開放が進む過程で作られた言葉だそうです。ではそれ以前は何と言ったかといいますと、一番普通だったのが“飯食ったか！”だそうです。大阪の“儲かりまっか”に一寸似ていますが、それくらい三度のご飯を食べるのが大変で

あり且つ自慢できる事だったのだそうです。でもこの言葉は外国人に聞かれて恥ずかしいということをつくった新しい挨拶言葉が“ニイハオ”です。このように食に対する執着が強いわけですから、お客を食事でもてなす時にはお客が食べきれない量の食べ物を出さなければもてなした事にはならないという考え方になります。従って丁度食べきれる程度の量でもてなす会席料理は彼等のもてなしのセンスには合いません。尤もこれらも少しづつ変わってきている様ではあります。

ここで勝海舟の“氷川清話”から一文を紹介します。“シナ人は、一国の天子を差配人同様に見ているよ。地主にさえ損害がなければ、差配人は幾ら変わっても少しもかまわないのだ。だから開国以来十何度も天子の系統が変わったのさ。こんなだから戦争をするには極めて不便な国だ。こないだの戦争(日清戦役)で日本は大勝利を得たが、負けたのは差配人ばかりで、地主は依然として少しも変わらない、ということをおぼえてはいけないうよ。”という言葉ですが、さすが勝海舟は根本的なところを確りと見ているなと感心させられました。

次にアメリカのジャーナリストのジム・マン著“北京ジープ《夢の合弁から失望へ...アメリカンビジネスの挫折》”からの引用ですが、彼の中国における“友人”の定義と“契約”の意味合いは私が中国業務を通じて感じてきたものと全く符合しています。即ち“現代のアメリカでは、友人とは共感しあえるというような目に見えない資質に基づいて親密な関係を持つ人間の事であり、必ずしもその人が与えてくれそうな利益に基づいた関係ではない。もし誰かがなにかを欲しいために友情を求めらるなら、それは純粹の友情ではなく、真の友人でもない。しかし中国では、個人にしる組織にしる、友人の定義は特別の恩恵を与えてくれるものことであり、それを拒むものは友人とは定義されない。”であり、“西側、特にアメリカでは、法の伝統から契約とは一つの関係を定義する究極的な表現として基本的に重要性をもつ実体である。しかし中国では、書かれた法律よりも個人的権威に基づく支配が重んじられてきた伝統から契約のもつ意味は軽く、それ自体よりも二つの組織の間の協調的な関係のシンボルとして重要なのである。契約に署名するということは、お互いに仲良く進めようと希望していることを示したことであり、こうして「友人」になれば、お互いにできるだけ相手から利益を引き出そうとしてよいというわけだ。”というようにグローバルな定義とは全く違った実態になっております。従って中国人と付き合う時には、この二つの定義をしっかりと頭に入れておく必要があります。

邱永漢氏が“大和民族は職人で、漢民族は商人である”と言っていますが、正にその通りです。即ち交渉では徹底的に相手に譲歩を迫って、これが限界だと見極めるまでは合意しません。それで相手が諦めて帰りの飛行機を手配し、

空港でチェックインして待っていると、慌てて呼び返しに来るというケースが結構あります。

議論の場では、日本人は話し合いの民族ですが、中国人はディベートの民族です。交通事故などでは警官の事情聴取の前に、野次馬が取り囲む中での当事

者同士のディベートが延々と続きます。また私はお目に掛かったことはありませんが、夫婦喧嘩では、家から外に飛び出して、大衆の前でディベートをやるそうです。中国の夫婦別姓は、本来は嫁には一族の姓を名乗らせないという究極の女性蔑視から来ているのだそうですが、一般的にはディベートとなると女性の方が強く、また毛沢東氏が“女性は大の半分を支えている”と煽ったこともあって、どうも女性の方が威張っている様です。

以上取り止めのないお話をしてまいりましたが、皆様が中国人の国民性を理解される上で、多少なりともご参考になれば幸いです。

4 .(特集) 名古屋大学を知る

東山会関西支部便り
編集事務局

名古屋大学は歴史的には昭和 14 年に名古屋帝国大学として創設され、昭和 24 年に新制大学になり現在に至っています。東山会関西支部メンバーには帝国大学時代の卒業生もおられ、会員の年代幅は非常に大きなものになっております。21 世紀に入り全ての大学が大きく変わろうとしています。名古屋大学も急速に変貌しているようです。そこで、当会報の新美教授の寄稿内容に一部重複いたしますが、最近の名古屋大学の状況で O B として認識しておきたいことなどを、大学が発行している P R 誌からまとめてみました。なお、参考のため大いに变化した東山キャンパスの最近の見取り図を名大からいただきましたので別紙(カラー印刷物)をご覧ください。

来年 4 月には国立大学の独立法人化が実施されます。各大学が自立性の高い運営を行うことになり、過去にない産官学連携や成果重点指向への動きなど、法人化を前に緊張感が伝わる変革が行われ始めています。このような背景のもと、名古屋大学では平成 12 年には「名古屋大学学術憲章」が制定され、わが国の基幹大学としての責務を果たすべく、学問の諸分野に 21 世紀にふさわしい高度な教育・研究を担う総合大学に向けた基本的な考え方が示されました。そして、昨年度から入学者数で大学院が学部を凌駕し、大学院への重点化が本格化しましたが、一昔前には考えもしなかった変化かと思えます。また、研究分野についても、文部科学省の「21 世紀 C O E プログラム(*脚注)」で全国の大学研究が大競争の時代に入りましたが、ここでは名古屋大学の躍進が目立ちます。特集 1 で学術憲章関係を記載しました。

昨年、この支部便りの中の白木支部長「ご挨拶」で紹介しました「全学同窓会」も予定通り昨年設立いたしました。そして今年 3 月、いち早く関東支部が立ち上がりました。特集 2 では「全学同窓会」の概要について記載しました。

(*注) C O E は Center Of Excellence (卓越した拠点) の略。文部科学省が、大学同士の競い合いを活発にして、国際競争力のある研究拠点を作る起爆剤にしようと 02 年度から始めた。優れた研究に重点的に予算を配分する。対象は大学院研究科専攻(博士課程レベル)で学長を通じて申請。選ばれると世界最高水準の拠点形成のための資金を年間 1 ~ 5 億円受けられる。

分野や件数はさまざまであるが、02 年度は 5 分野・113 件、03 年度は 5 分野 133 件が採択されたが、名大は 02 年度 7 件(全大学中 3 位)、03 年度 6 件(同 6 位)の採択となったが健闘が光る。

(この特集の引用参考資料)

- ・特集 1 : 名古屋大学のプロフィール平成 14 年度
- ・特集 2 : 名古屋大学全学同窓会 No . 1、2
- ・特集 3 : 名大トピックス No . 120

(特集1)

「名古屋大学学術憲章」に基づく

アカデミックプランの推進について

名古屋大学が発行している「名古屋大学のプロフィール2002」によれば、「名古屋大学学術憲章」につき《学問の府として、大学固有の役割とその歴史的・社会的使命を確認し、新しい知の時代を切り拓くため、我が国の高等教育をめぐる情勢及び本学の歴史と現状を大胆に分析し、かつ、21世紀に本学が果たすべき高度な研究教育を展望し、平成12年2月に本学の学術活動の基本理念を「名古屋大学学術憲章」として制定した》としています。企業における経営基本理念と行動指針の制定に相当するものと言えます。

学術憲章は、(1)知の創造、(2)学問の建設、(3)自主、自律の人材養成を進めることを基本目標に据え、21世紀を先導する名古屋大学自らの指導的な理念として全学が共有し、着実に実施することを自らに課しています。

この学術憲章に基づきアカデミックプラン(いわゆる「中期計画」)が進められているということですが、組織的にも「高等研究院」、「教養教育院」といった新たな組織を発足させました。「高等研究院」は平成14年4月に設置されノーベル賞受賞の野依教授が院長を務めておられますが、参考までにその概要を簡単に紹介します。

(高等研究院)世界トップクラスの研究に取り組み、その成果を学内外に発信するため、主として一定の期間、研究のみに専念する教員によって構成される研究組織。高度な研究を学内から公募し、学外者を含めた機関で審査の上、プロジェクトの可否を決定し、選ばれたプロジェクトには予算・人材・設備の優遇措置を図る。

以下、憲章の全文を掲載します。

名古屋大学学術憲章

名古屋大学は、学問の府として、大学固有の役割とその歴史的、社会的使命を確認し、その学術活動の基本理念をここに定める。

名古屋大学は、人間と社会と自然に関する研究と教育を通じて、人々の幸福に貢献することを、その使命とする。とりわけ、人間性と科学の調和的發展を目指し、人文科学、社会科学、自然科学をともに視野に入れた高度な研究と教育を実践する。このために、以下の基本目標および基本方針に基づく諸施策を実施し、基幹的総合大学としての責務を持続的に果たす。

1．研究と教育の基本目標

- (1) 名古屋大学は、創造的な研究活動によって真理を探究し、世界屈指の知的成果を生み出す。
- (2) 名古屋大学は、自発性を重視する教育実践によって、論理的思考力と想像力に富んだ勇気ある知識人を育てる。

2．社会的貢献の基本目標

- (1) 名古屋大学は、先端的な学術研究と、国内外で指導的役割を果たしうる人材の養成とを通じて、人類の福祉と文化の発展ならびに世界の産業に貢献する。
- (2) 名古屋大学はその立地する地域社会の特性を生かし、多面的な学術研究活動を通じて地域の発展に貢献する。
- (3) 名古屋大学は、国際的な学術連携および留学生教育を進め、世界とりわけアジア諸国との交流に貢献する。

3．研究教育体制の基本方針

- (1) 名古屋大学は、人文と社会と自然の諸現象を俯瞰的立場から研究し、現代の諸課題に応え、人間性に立脚した新しい価値観や知識体系を創出するための研究体制を整備し、充実させる。
- (2) 名古屋大学は、世界の知的伝統の中で培われた知的資産を正しく継承し発展させる教育体制を整備し、高度で革新的な教育活動を推進する。
- (3) 名古屋大学は、活発な情報発信と人的交流、および国内外の諸機関との連携によって学術文化の国際的拠点を形成する。

4．大学運営の基本方針

- (1) 名古屋大学は、構成員の自律性と自発性に基づく探求を常に支援し学問研究の自由を保障する。
- (2) 名古屋大学は、構成員が、研究と教育に関わる理念と目標および運営原則の策定や実現に、それぞれの立場から参画することを求める。
- (3) 名古屋大学は、構成員の緩急活動、教育実践ならびに管理運営に関して、主体的に点検と評価を進めるとともに、他者からの批判的評価を積極的に求め、開かれた大学を目指す。

(特集2)

《名古屋大学全学同窓会》の設立について

平成14年10月27日に名古屋大学全学同窓会(以下「全学同窓会」とします。)が設立されました。名大では10年以上前から設立に関した動きがあったようですが、実現しませんでした。平成13年10月に設立準備委員会が設置され、以降毎月の委員会開催で上記設立に至りました。

全学同窓会の会長は豊田章一郎トヨタ自動車取締役名誉会長(工学部機械学科卒)が就任されています。なお今年3月、関東支部が組織として立ち上がりました。

会則に記載されている主な事項は以下の通りです。

- ・目的(第3条): 本会は、名古屋大学と社会を結ぶ必須の組織として、名古屋大学の発展と社会への貢献を図るとともに、会員相互の交流、親睦等を目的とする。
- ・会の事業(第4条): 本会は前条(注:第3条)の目的を達成するため、次の事業を行う。
 - 一 名古屋大学との連携と協力
 - 二 交流会、講演会等の開催
 - 三 部局同窓会設立の支援
 - 四 その他本会の目的に沿った事業活動
- ・支部(第5条): 会員の希望により支部を置くことが出来る。
- ・会員(第6条): 本会は、次に掲げる者をもって構成する。
 - 一 名古屋大学・名古屋大学大学院の部局同窓会の会員
 - 二 前号以外の名古屋大学・名古屋大学大学院の卒業生・修了生、教職員及び教職員であった者
 - 三 その他名古屋大学・名古屋大学大学院に関係のある者及び法人で、会長が認めた者
- ・経費(第19条): 本会の経費は、支援会員(会員のうち支援会費納入者)の会費、部局同窓会分担金及び寄付金等をもって充てる。

以下、「同窓会会報 No.1」に掲載されているQ & Aの主要箇所の要点を記載します。

Q1: 全学同窓会を作るメリットは何か。

A1: 名大は平成16年4月に法人格を取得する。以降は法人としての自己責任で事業を進める中、社会と密接に連携する必要があり、その際、

全学同窓会が人的な交流を通して、中核的な役割を果たすと期待できる。

- Q 2 : 部局同窓会が既にあるのに、なぜ現時点で全学同窓会の設立か。
- A 3 : 部局同窓会の意義はこれからも減ることはない。しかし、法人格を持った名大が社会と連携して活動していくためには、各分野を横断的に組織した全学同窓会を持つことこそが、総合大学としてのメリットを最大限に生かすことになる。部局同窓会と全学同窓会が役割を協力して初めて、大学と社会を結ぶ必須の組織としての役割が果たせると考える。
- Q 3 : 各会員にとり、何がメリットになるか。
- A 3 : 今まで以上に、名大全体の情報を簡単に手に入れることができるようになる。また、卒業生や名大関係者の社会における活躍を把握し、大学とのつながりが増す。また、部局を越えた会員相互の連携も可能となる。会員、大学双方にメリットのある多くの活動を計画しており、順次実現に努力する。
- Q 4 : 全学同窓会の会員資格について。
- A 4 : 原則的に、名大に在籍したことのある人、及び現在在籍している人は資格がある。
- Q 5 : 登録はどうすればよいか。
- A 5 : 部局同窓会の会員は、全学同窓会の会員として登録していく。
- Q 6 : 同窓会費は必要か。
- A 6 : は 10 万人規模になるので、会員に会費をお願いすることはない。同窓会の運営費用は内外の個人、法人からの寄付金及び支援会員の会費等でまかなう。

(特集3)

名大総長の大学院入学式辞に見る大学の変化

去る4月8日、豊田講堂にて平成15年度入学式が行われました。式は大学院と学部は別に行われ、それぞれに松尾稔総長が式辞が述べられました。今年度の入学生数は大学院が2,283名(博士課程前期1,655名、同後期628名)、学部が2,254名でした。昨年度から既に大学院入学生数が学部入学生数を超えています。

松尾総長の入学生への式辞は名大の広報誌「名大トピックス」やインターネットHPで公開されていますが、大学や名大の変化を知る上で興味ある内容となっていました。ここでは大学院入学式辞から拾ってみました。

1. 質の高い大学院重点大学に向けて

- ・本学における学部学生の総数は約1万人であり、大学院生の総数は6千人であります。そのうち留学生が約1,200名です。(中略)大学院重点大学の性格が学生数の上でも明確になってきています。
- ・レベルの高い大学院重点大学であり続けるためには、常に反省に立った上での、皆さんとの「共同作業」が必須であると考えています。
- ・...敢えて最初に述べたい。“自分は何のために何を求めて大学院へ、中でも名古屋大学大学院へ入ってきたのか”すなわち、動機と目的を再確認していただきたい。(中略)“何となく”と答えられるのが一番困るのです。(中略)志を高く掲げ、自分自身が納得した上で、「限界」とおぼしきものへ挑戦する気概で臨んでいただきたい。
- ・皆さん、学部の延長線上で大学院を考えることは止めましょう。きっかりと区分し、あらゆることに亘って両者は不連続なものとするのが大切です。

2. 学生の知的向上に向けた激励

- ・(最近の生徒、学生の学力低下問題について)“名大生に限って言えば知識はむしろ増加している。しかし、その知識の活用度や、活用に対する意欲は低下していると言わざるを得ない”との報告を受けています。
- ・本学の学生にとっては、高校時代の教科書にあるような知識はあたりまえのことで、受験勉強を余りやらなかったのなら、今からでも遅くはない、やり直していただきたい。
- ・大学院生のレベルは欧米の一流大学に比べ、明確に格差を生じている、残念ながら下位にある、と言わざるを得ないのであります。
- ・21世紀の学術とその活用には、広い意味での教養が不可欠です。そのた

めには、その基礎となる知識が必須であり、知識は多種多様、雑多であります。雑多な知識や自己の考え、思いつきなどを、有用・不用などと無理に整理をつけようと思わずに、不安定な状態で頭や心の中に詰め込んでおくことが大切だと考えます。ある日突然、何かのきっかけで、新しいコンセプトが頭に浮かび、それら雑多なものが瞬時に一つに繋がり、研究や仕事の方向が煮えてくる、そういう感動をきっと経験される時がくるでしょう。

3. 国立大学の法人化について

- ・私は常々言ったり、書いたりしています。「国立大学は今、明治の学制発布、第2次大戦敗戦後の新制大学の発足に継ぐ、第3の渦中にある。これを災厄の到来、狼の襲撃と見るか、大学改革の千載一遇のチャンスと捉えるかにより、各大学の対応は180度異なって来るであろう」と、申しております。
- ・知の拠点たるべき大学の本来の使命は、自由で、個性的で、創造性のある卓越した研究成果を挙げると共に、優れた人材の育成を通じて、広く社会に貢献することであります。そしてその時、最も重要なことは、「学問の自由」、「大学の自治」だと考えます。
- ・法人格の取得は、大学の裁量権が大幅に拡大する意味において大きな利点を有すると言えますが、(中略)言うほどに簡単な問題ではありません。特に心すべきは、「大学の自治」は誰かが保障してくれるものではなく社会への説明責任を持って、自ら守るべきものだと思えます。

4. 「名古屋大学学術憲章」とアカデミックプランについて(略:特集1)

5. 「21世紀COEプログラム」挑戦の意義(COE:特集前文参照)

- ・COEというのはCenter Of Excellence すなわち「世界の拠点」という意味です。好むと好まざるとに拘わらず、各大学間の厳しい競争とある種のランキングが始まっている、ということです。
- ・昨年度は「生命科学」、「化学・材料科学」、「情報・電気・電子」(中略)の5分野に亘り審査が行われました。各大学が厳選した上で、全国で464件の応募があり、113件が決定されました。1件も採択されない大学が多い中、名古屋大学は応募11件中9件がヒアリングに残り、7件が採択されました。大学の規模としては倍以上もある東大、京大の各11件に次ぐ第3位の評価でした。
- ・今年度は残りの5分野(医学、土木、建築、機械、・・・)についての審査が行われます。良い成績を残すべく、努力しているところです。(中略)好むと好まざるの問題ではなく、名古屋大学は、常に日本の中心的基幹総合大学を目指さなければならないと申し上げているのであります。

5 . 我が生涯学習 尺八とは縁切れず

岡庭 國男（昭和23年卒）



私が小学校の頃、二人の姉は家庭教養の一つとして、我が家で琴を習っていた。私は琴の音色がとても好きで、流れ来る旋律を聞きながら、“六段の調”などたちどころに覚えた記憶がある。思えばこれらが後年、箏曲・尺八との関わりをもつことになる素地であったと思う。

終戦直後の名古屋大学時代、下宿で、友人はバイオリン、私は尺八のお粗末な安物を手に入れ、思い思い我流で音出ししていたことを思い出す。

大学卒業後、相生市に所在する播磨造船所（後の石川島播磨重工）に入社、同じ職場に都山流尺八の師範が居られたことがきっかけで、仲間とともに、その方に弟子入りした。そして、週1回程度師範の家へ通い、やがて、箏曲演奏会にも出演するようになり、また数年後には、準師範の免許を習得するよう指導も受けていた。

しかし、その頃から私にも、仕事一筋の人生が始まっており、尺八の稽古通いをするような時間の余裕など全くなり、いつとはなしに、仲間も同様に尺八から遠のいてしまっていた。

そして、高度成長期の時代も過ぎ、第2の人生も終え、地域活動への道を模索すべく、兵庫県高齢者いきがい創造協会、いなみ野学園（高齢者大学・在加古川市）に身を寄せ、学習の傍らクラブ活動として民謡部に入部、初めて民謡の世界へ飛び込んだ。

1年程度経過した頃、民謡の女性師匠から、「あなたは尺八をやるのではないか、吹いてみなさい」と言われ、師匠の三味線に合わせて2～3曲演奏したところ、「なかなかやるじゃないか、これからは尺八伴奏をしなさい」と言われ、以後唄とともに民謡尺八にも取り組むこととなった。

当時先輩仲間の中には、尺八が好きで、尺八を習いたいため、尺八伴奏を希望するものが若干いたが、その師匠は、下手な尺八は三味線の邪魔になると受け付けなかったのである。その点私は、新参ながら師匠に目をかけていただき有難かった。

それから約8年経過した現在、師匠は2代目男性師匠となったが、尺八伴奏に関しては、後継者も見つからないまま、今も私の勤めは続いている。

さて一概に、尺八伴奏といっても、師匠の意を戴し、また三味線と歩調を合わせたの演奏のためには、それなりの予習、作譜、資料作り等、努力を要することも多く、重荷に感ずることもしばしばではあるが、4年間お世話になった民謡部教室のためのご恩返し、また、ともに楽しいひと時を過ごさせてもらっている民謡OBサークルの方々のためにも、私のできることはさせてもらいたい今のささやかな心境である。

そして、これが何時まで続くのか、80歳を目の前にしながら、今も縁の切れない尺八との人生である。



6 . 会員寄稿

(1) 第 4 回 「 東山に帰る日 」 に参加して

佐藤 文雄 (昭和 2 7 年卒)

第 4 回 「 東山に帰る日 」 が平成 1 5 年 6 月 6 日 (金) に開催されました。

今回の祝賀会に招待を受けた対象者は、昭和 2 7 年卒 (1 1 回生) ならびに昭和 2 8 年卒 (1 2 回生と新制 1 回生) の方々であり、参加者は総勢約 3 6 名、うち 1 0 名が関西支部のメンバーでありました。

当日の天候は祝賀会の日に相応しい快晴、初夏の日差しも強く感じられる日でありました。時間に余裕もあったので案内書に従い、半世紀前には、左右に何も無く、とぼとぼと歩いて通った通学路の想出に耽りながら、本山からバスにゆられ名大前に到着。バス停付近では、地下鉄の駅の工事も最終段階とかで、埃っぽく、また豊田講堂辺りでは学園祭の準備でいろいろな鳴物が騒々しく、人の往来も結構多くて、大学構内とは思われない異様な活気を感じながら、集合場所の工学部 2 号館 2 階に 1 3 時 3 0 分頃到着しました。

1 4 時から 2 2 2 講義室にて祝賀会が始まり、始めに東山会会長の挨拶 (代理 : 安田副会長) に続いて、新美教授による 「 大学の現状説明 」 と 「 流体工学研究の今昔 」 と題しての菊山教授の講演が行われました。

特に 「 大学の現状説明 」 の中で、名古屋大学が日本の大学ランキングベストテンの上位にランクされていることは報道で周知であるが、この評価は理学系の審査が主体であり、工学系についてはこれから審査を申請する段階にあり、必ず高い評価を受けることを信じて懸命に努力していると強調されました。

1 5 時から 2 号館 2 階の入口階段にて、参加者全員による記念写真撮影を行ない、つづいて 1 5 時 1 5 分からフリータイムということで、次に示すような 6 つの見学コースが用意され、各人の希望するコースの見学に移りました。

創造工学センター (I B 電子情報館) コース 機械・航空実験棟コース
熱水力実験棟コース 生産加工関連コース 材力関連コース
機力・制御関連コース

上記のうち の I B 情報館コースは、構内の最高層建物であり、内部設備の見学と云うよりも周辺の景色を眺めるコースであり、概ね半数の参加者がこのコースに参加しました。小生もこのコースに参加し高所から大学構内を始め、大学周辺、市内の遠望に 5 0 年余りの時の流れをしみじみと感じた次第です。

見学を終え、1 6 時 3 0 分からは豊田講堂裏シンポジオン内のユニバーサルクラブにて、糟谷理事の司会により懇親会が開催され、会長挨拶、乾杯、参加者の卒業別代表者によるスピーチ等が行なわれ、和気あいの雰囲気の中で本当に懐かしい故郷に里帰りした気分の、楽しい夕べを過ごさせて頂きました。

終わりに、今回の企画について、いろいろとお気遣い頂きました東山会の幹部の方々を始め、見学会ならびに懇親会等でお世話頂きました諸先生方に、心から厚く御礼申し上げます。

(2) 森瀬 和信氏を偲ぶ

田中 洸 (昭和28年卒)



平成15年4月1日、森瀬さんは長年の闘病の甲斐なく逝去されました。関西支部にあって彼と私は<自立の人生>を歩んだ二人でした。ご家族の皆様へ哀悼を申し上げますとともに、痛恨の思いで拙文を捧げます。

彼は卒業後一旦他社へ入社されましたが、二代目一人息子の立場から父上の会社、現 太平鋼材工業(株)へ戻られました。御社は70年前は伝導器具を立売堀で販売されていたようですが、軸類製造の工場をつくれ六角シャフト、特殊ナットから軸用鋼材の製造へ、そして更に鋼材の圧延へと拡張。昭和30年頃より平鋼の製作へ主力をおかれ多品種、少量生産で独自の分野を開拓されて磨き工場を建設、塑性加工で超硬金型から引き抜く精度の高い製品が生み出され、溶接箇所にも利用でき機械加工に比べると遥かに低コストであるとのこと。この独自の技術で東南アジア向けに事業を展開されました。かくして不断の合理化と経営方針の柔軟な対応は目を見張るものがありました。

彼は個人的にも非常に魅力ある人格の持ち主で、趣味は自らバイオリンをたしなみ、名曲のCDを友人に振る舞う程の懲りよう。そしてリクリエーションとしての釣りへの懲りようも尋常ではありませんでした。また、彼の“石上露子(いそのかみつゆこ)(山崎豊子氏の小説<家紋>のモデル)の研究”では、<家紋>の主人公の葛城郁子と詩人石上露子が共に旧家の一人娘という立場で、意中の人との結婚が遂げられなかった様々の事象をあげて、その人間性を追及されましたが、ここにも彼の人格の奥深さを垣間見る思いがしました。

楽しかった思い出として平成10年10月29日茨木カントリーでの関西支部ゴルフコンペ。彼は親父の形見のクラブを自慢げにがんばっていました。ちなみに、彼は4位、小生は6位でした。

平成12年6月5日犬山長良川鶉飼い(S28年卒甚六会)での犬山ホテルでの記念撮影が彼の最後の姿となりました。また、彼は東山会関西支部の幹事として人脈の広さがうかがわれました。

“田中君、お互いに<自立の道>を選んだ以上、常に方針の変更をおそれず、また、得意の分野には錐で揉む様に一点集中して解決を図る以外方法は無い。苦労だが楽しみだね。”

いつも口癖のように語りかけてくれた人なつこい笑顔が忘れられません。

ご冥福を祈ります。

7. 平成 14 年度東山会関西支部総会報告

幹事 和田 滋憲(昭和 43 年卒)

第 40 回となる関西支部総会は、平成 14 年 11 月 16 日(土)[16 時~20 時 20 分]中央電気クラブで開催されました。

参加者は会員 23 名のほか名大からご来賓として大学院工学研究科の新美智秀教授をお迎えしました。

総会は次の順序で行われました。

1. 講演会：16 時~17 時 30 分(司会 清水副支部長)
2. 総会：17 時 30 分~17 時 50 分(同 青山幹事)
3. 懇親会：18 時~20 時 20 分(同 荻原幹事、和田幹事)

以下、各概要を記載します。

1. 講演会

- (1)「大学の近況について」・・・講演概要は本誌 2. をご覧ください。
名古屋大学大学院工学研究科 機械工学専攻
機械エネルギー工学講座 教授 新美 智秀氏(S52)
- (2)「中国人と付き合うには」・・・講演概要は本誌 3. をご覧ください。
川本 利治氏(S33)

2. 総会

- (1)支部長挨拶 白木支部長(S23)
 - ・新美先生、川本氏への講演の御礼
 - ・東山会の H14 年度の大きな出来事として、10 月の“工学部創立 60 周年記念祝賀行事”、“全学同窓会設立総会の開催”を紹介
 - ・東山会本部と支部のパイプ構築、支部の今後の運営につき関西支部会員に協力を要請
- (2)東山会本部代表挨拶 新美 智秀氏(名大教授：ご来賓)
 - ・東山会々報は財政的に破綻寸前にため、財政基盤の確立が必要(会報を HP 掲載については暫定的にスタートしているが)
 - ・名簿(東山会、工学部全体)は、一方的に送りつけられているクレームもあり、希望者への送付などの検討も
 - ・同窓会についてはメリットのある事業の検討へ
 - ・「東山に帰る日」を 6 月に実施：S27、S28 年卒対象
 - ・関西支部の発展を祈ります
- (3)会計報告 山田幹事(S33)
 - ・「平成 14 年度東山会関西支部会計報告」(本誌 参照)が報告、承認された

(4)一般報告 深谷幹事(S34)

- ・ 支部役員会の開催(4月、8月)
- ・ 「東山会関西支部便り」の内容につき概要説明
- ・ 今回の支部総会案内の発送、回答状況について

3. 懇親会

(1)写真撮影：参加者全員(本誌の表紙参照)

(2)立食懇親会

- ・ この席でゴルフ同好会(野崎幹事 S29)、囲碁同好会(青山幹事 S32)の報告があった
- ・ 参加者スピーチ(参加者の大半にスピーチをいただいた。要点を得ないが一部の方の一言を記載します)
(土川氏 S27) 来年は「東山に帰る」に出る。何かコメントを考えていきたい
(黒田氏 S33) 呉市に住んでいる。今回初めてこの会に参加した
(白井氏：阪大教授 S39)(阪大)研究室に来ていただいたら、(ロボットの)研究成果をお見せします
(工藤氏 S17) 10月で84歳になった。年寄り扱いには素直になった
(山田氏 S33)洋ランの栽培している。ランにはナメクジがつくが、夜、ピンセットで取るのが良い
(兼松氏 S39) 脳梗塞で倒れたが、幸い一日の半身不随で回復した。以来、医者を信頼している
(川口氏 S20) 体重を増やせば早死にする。体重維持が必要
- ・ 学生歌等斉唱(山本氏 S23、青山氏 S32、荻原氏 S43)
「若き我等」、「伊吹おろし」、「北帰行」、「琵琶湖就航の歌」など配布の学生歌、寮歌等全員が斉唱
- ・ 終わりに、佐藤副支部長(S27)が「東山会関西支部総会への若い会員の参加を強く望む」と会の盛り上げを訴えた
- ・ 最後に清水副支部長が三本締めで閉会

以上

8. 平成14年度東山会関西支部会計並びに監査報告

期間：平成13年11月10日より平成14年11月15日まで

収 入	金額 円	支 出	金額 円
13年11月10日の総会会費 (9000円×25人)	225,000	13年11月10日の総会費用 電機クラブ	203,539
本部祝金	50,000	写真代	5,954
年会費(2000円×96人)	192,000	通信費	28,600
預金利息	84	総会案内制作費	76,676
		総会案内発送費	48,136
		会議費	42,901
		コピー,事務用品	3,116
		旅費他	37,220
当年度の収入合計	467,084	当年度の支出合計	446,142
前年度からの繰越金	380,757	次年度への繰越金	401,699
合 計	847,841	合 計	847,841

以上のとおりご報告いたします

会計幹事

山田 晃



以上の報告は適正なものと認めます

会計監査

森瀬和信



10 . 編集後記

- ・ 関西支部支部長の白木博明氏が 7 年の任期をもって退任される。白木さんの当支部活動の活性化と発展に対する熱い思いは当会報の 1 . 「支部長退任のご挨拶」でしっかり述べられており感無量です。白木さん本当に有難うございました。
- ・ 新美教授、川本さんの寄稿文は昨年の総会の講演をもとに、まとめていただきました。総会当日を思い出して読んでいただける方も多いかと思えます。
- ・ 国立大学も生き残りをかけた競争の時代に入ったようです。今回は特集として「名古屋大学を知る」を取上げました。情報源とした名大の広報資料には様々な情報が盛り込まれ、掘り下げて知りたい情報も親切に記載されています。しっかりした情報公開が大学を自律的に高める作用があるのかも知れません。
- ・ 昨年秋「名古屋大学全学同窓会」が創設され、今年 3 月に関東支部が立ち上がりました。関西支部も早晚設立されることになると思います。関西地区でオール名大出身者の横方向の人脈が広く構築されていくことを祈念したい。
- ・ 岡庭國男さん(S23 年卒)には長年のご趣味の尺八につき回顧的に寄稿頂いた。これからもますますお元気でご活躍ください。
- ・ 「東山に帰る日」の今年は S27、28 年卒の方が対象で開催され、関西支部からも多数参加されたとのこと。その日の状況につき佐藤文雄さん(S27 年卒 : 当支部副支部長) にレポートしていただいた。近く対象となられる方は必読です。
- ・ 大変残念なことですが、長年に亘り当支部の幹事を務めていただいた森瀬和信様(S28 年卒) にはこの 4 月ご逝去されました。同期の田中洸さんに急遽、追悼寄稿をしていただき有難うございました。森瀬様のご冥福をお祈りいたします。
- ・ 最後ですが当会報の作成のため、貴重な時間を割いて寄稿の労をいただいた名大の新美教授、関西支部の白木支部長、佐藤副支部長、会員の川本様、岡庭様、田中様に感謝いたします。

(H15 年 9 月 W 記)